

鳥取・吉成焼について

八峠 興¹

A study of Yoshinari ware, Tottori City

Kou YATOUGE¹

はじめに

吉成焼は鳥取藩が試みた最初の磁器窯（鳥取県 1971）で、「因吉」の銘をもつ伝世品もある（吉田 1981）が、様相は明らかではない。この度、鳥取県立博物館が所蔵する吉成焼の陶片及び窯道具を実見し、実測と写真撮影を行う機会を得た。併せて文献資料についても検索を行い、新たな成果を加えて報告する。

資料は鶴戸口氏が昭和 50（1985）年 7 月 4 日に「吉成 48 片」として寄贈したものである。ただし採集場所等、経緯は不明である。

1 文献からみた吉成焼

吉成焼の歴史については、これまで概ね『鳥取藩史』の記述に拠るため、その記載内容を引用する。

【資料 1】

『鳥取藩史第六巻』殖産商工志、四陶器（明治 42 年～昭和 8 年編纂）

「吉成壺焼 文化六（1809）年より、御国産方にて試みられし所、邑美郡吉成村庄屋の引請にて、専壺を焼きたり。されど、其成績良好ならず。暫くにして廃せられし如し。按ずるに、浜坂壺焼きは、吉成廃業の後起りたるなり。」御国日記・田中志之蔵永代記録牒。

『鳥取藩史』に記載された出典のうち、『田中志之蔵永代記録牒』は確認できない。『御国日記』は本文の『家老日記』（註¹）にあたり、資料 3 と 4 がある。また『諸事控』（鳥取県 1980）には、資料 2 がある。

【資料 2】

『諸事控』文化六（1809）年十月七日

「一邑美郡吉成村傍示にて、御国産壺焼致し度旨願書を以申達し候二付、御新田奉行田川曾右衛門場所見分致し候処、村方差障り無之二付、其段御家老中え申達

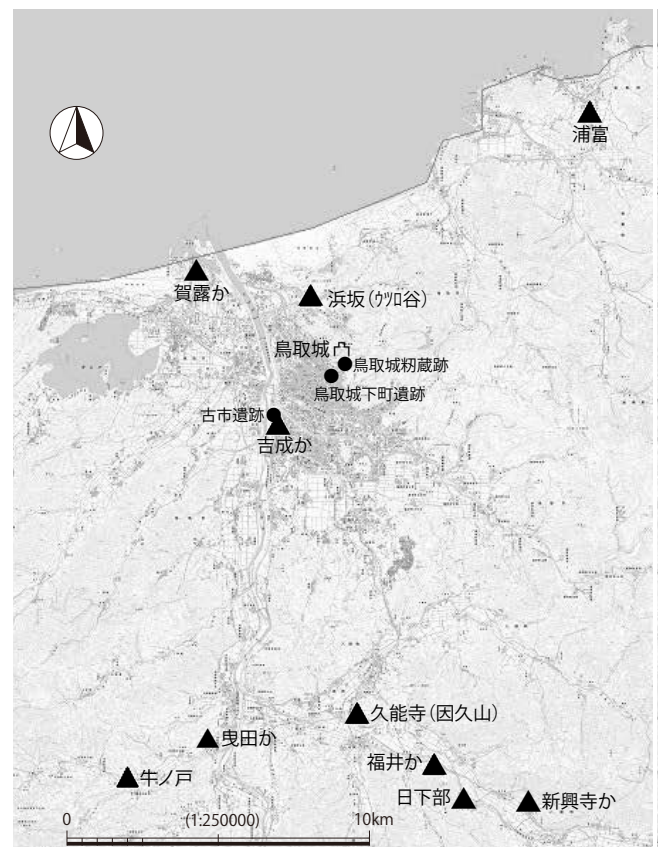
し候処御聞届相済、御郡へ申遣ス。尤香河次郎右衛門えも右之趣御聞届相済候儀、俵官兵衛より申遣ス。」

【資料 3】

『家老日記』文化六（1809）年十月八日

「一御国産方之者共儀、壺試御用当分懸り被仰付旨、香河次郎右衛門江申渡之。

宮地為左衛門 山根得兵衛」



第 1 図 吉成窯ほか位置図
(国土地理院地形図から一部転載・加筆)

¹ 鳥取県埋蔵文化財センター 〒 689-0151 鳥取市国府町宮下 1260 番地

Tottori Prefectural Center for Archaeological Operations, Miyanosita 1260, Kokufu-cho, Tottori, 689-0151 Japan

E-Mail: yatougek@pref.tottori.lg.jp

[受領 Received 29 November 2018 / 受理 Accepted 22 December 2018]

【資料4】

『家老日記』文化七（1810）年七月二十四日
 「一御国産方左之者共、此度石焼職人罷越、追々取懸り候二付、吉成焼物場江日々出勤致させ候段、香河次郎右衛門より申聞、承置候事。

宮地為左衛門 山根得兵衛

資料2では国産座が壺焼^(註2)を吉成村の傍で行うものの、資料3のように翌日には、時間がかかるとの見通しを述べる。また資料4のように翌年の七月には石焼職人を招聘し、生産を行う旨が記される。

【資料5】

『鳥取藩史第六巻』殖産商工志、四陶器（明治42年～昭和8年編纂）

「浜坂壺焼 邑美郡浜坂壺焼の起源は詳ならず。思うに、国産奨励の意にて、吉成廃業の後を受けて、始められたるが如し。」

資料2～4を見る限り、資料5のような推測は概ね妥当であろう。ところが『諸事控』と『家老日記』を再見したところ、新たに資料6と資料7を確認した。

【資料6】

『諸事控』享和三（1803）年三月二十六日

「一邑美郡浜坂村石焼職場竈小屋場所、風当り悪敷二付、所替願、徳屋忠蔵より新御役所え差出、右願書香河次郎右衛門より相廻り候二付、場所為見分御新田奉行罷出候二付、忠蔵義も願場へ罷出候様、御吟味役より香河次郎右衛門え致文通、場所荒神山東側相願、村方取調候処、差支無之二付、其段罷歸り申達御聞届ケ相済候二付、勝手次第竈小屋取懸り候様、尚又次郎右衛門え及文通、御郡えも申遣ス。則願書此所へ括置。」

資料6によると吉成焼が開窯した文化六（1809）年十月を遡る享和三（1803）年三月には既に浜坂で磁器生産にとりかかるものの、試行錯誤していたことが記される。また、吉成焼の終焉についてもこれまでの記載とは異なる。

【資料7】

『諸事控』文政元（1818）年八月十二日

「一邑美郡吉成焼御用物被仰付、此節取懸り候に付、同所にて致火葬候儀当分差留呉候様、御国産御吟味役杉田源六より談有之、尤御用物相済候上は其趣申来候筈に付、承知之及返答、其段御郡え申遣ス。」

これには吉成焼は文政年間のはじめまで続いており、藩の御用の品を焼いていたことが記される。さらに吉成焼と浜坂焼の関係を推測させる箇所もある。

【資料8】

『家老日記』文政六（1823）年八月十二日

「一産物役所門番亀蔵と申者、右門番御免、浜坂壺焼

場棟梁被仰付、御夫持給其儘可被遣哉と申達、其通被仰付旨、石黒軍次江申渡之。」

【資料9】

『家老日記』文政九（1826）年四月十五日

「一壺焼棟梁亀蔵と申者、御不用二付、永之御暇被遣、尤先達而吉成焼物以来、旧年御用向相勤候儀二付、格別二蠟座出目銀之内を以、毎歳銀七枚宛五ヶ年之間、可被遣哉と、蠟座奉行申達、其通承届候事。」

資料9には、「亀蔵」という浜坂壺焼の棟梁の任免に関する記録の中に、「亀蔵」が吉成焼から焼物生産に関わり続けたとある。また資料8には、「亀蔵」が浜坂焼の棟梁を拜命する前には産物役所の門番をしていたと記される。かりに「亀蔵」も関わる吉成焼が廃窯した後に産物方の門番をしていたと考えるならば、吉成焼の終焉は、文政六年（1823）八月十二日を下らないことになる。さらに浜坂と吉成の併行する記録は確認できてはいないことから、浜坂と吉成の間で窯場の移動も考えられるだろう。

以上の資料から吉成焼の歴史を概観すると、文化六（1809）年に陶器窯として開窯、文化七（1810）年には試みとして磁器生産を開始、文政元（1818）年には藩の注文で「吉成焼」を生産するまでとなり、文政六（1823）年には閉窯していたこと、磁器生産の期間は短くて八年、長くみれば十数年に及ぶことになる。これまで一般的に短期間の割には銘をもつ吉成焼の製品が比較的多く伝世していることに疑問が出されていた（吉田1981）が、それは解消できる。

新たな疑問もある。「吉成焼」として一旦は確立した窯の閉窯した理由は記されていない。文献7をみると、火葬を中断して営窯していることから、燃料不足が指摘できる。ただし陶石や呉須の入手経路、亀蔵以外の陶工の確保等、不明な点が多い。

2 陶片と窯道具からみた吉成焼

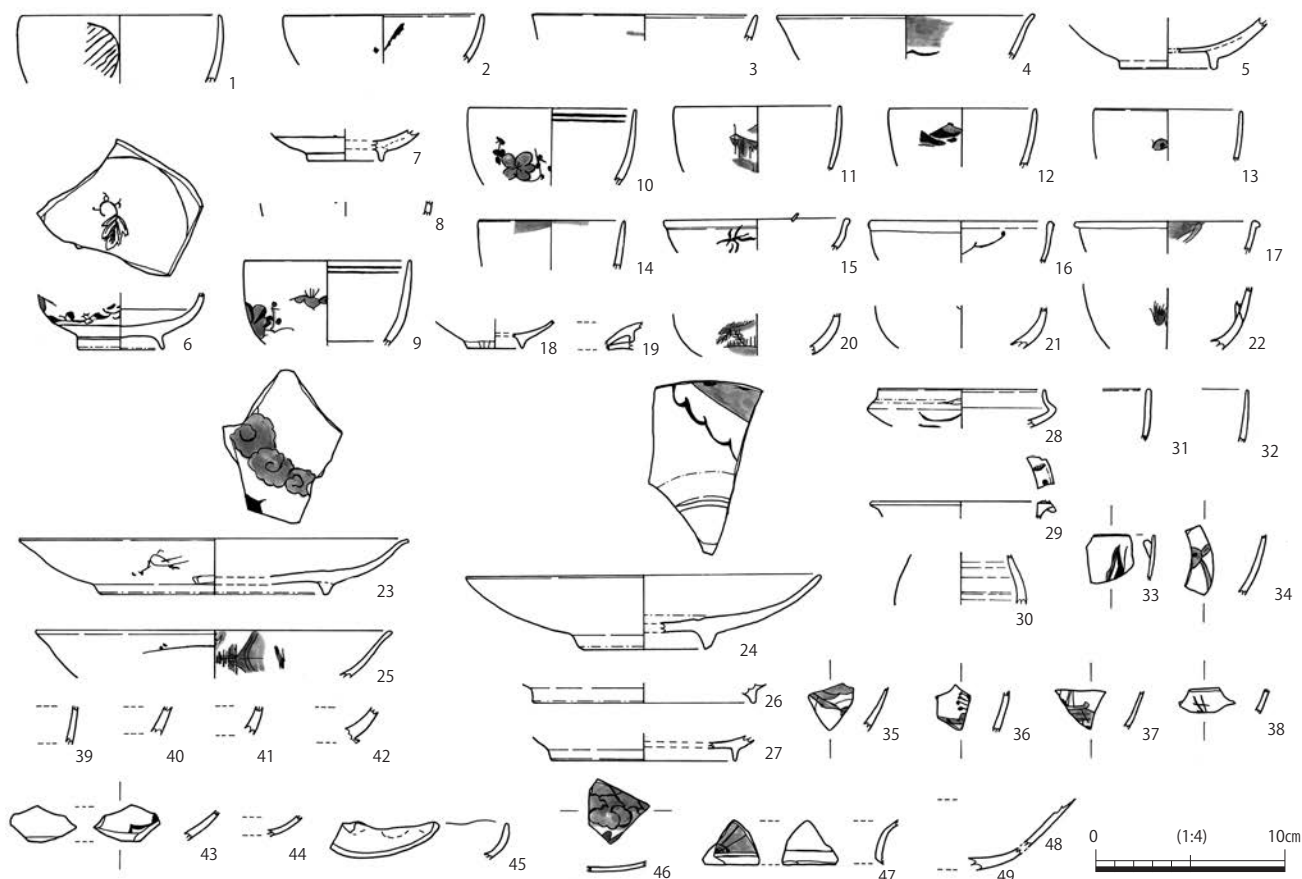
博物館所蔵資料のほか、吉成に北接する古市遺跡の発掘調査で「吉成焼」と報告される陶片と窯道具がある（鳥取市教育福祉振興会1999）。

(1) 博物館所蔵資料

筆者が分類した内訳は、陶片47点、素焼き2点、窯道具58点で、ほか古墳時代から古代の須恵器片が数点ある。このうち、須恵器片を除く陶片と窯道具について全点の実測図と撮影写真の一部を掲載する。

a 陶片

1・2は碗。いずれも口縁部は内湾する。1は体部外面中位に丸文に斜線が入る。2は体部内面に植物の文様か。3は碗の口縁部か。外面に僅か染付の不明文。



第2図 吉成焼の陶片（所蔵資料）

4は鉢。口縁部は緩く外反する。内面には染付。5・6は碗の高台部。いずれも畳付のみ露胎で、見込には草文か。外面には草花の文様。7は碗の高台部で外面に二本の圈線がある。8は体部片か。9～17は小碗。9は外面に梅花と不明文。内面の口縁端部付近に二本、見込付近に一本の圈線が入る。10は外面に梅花文か。内面の口縁端部付近に二本の圈線が入る。11は外面に楼閣または四阿を含む山水。12の外面には山を含む風景か。13の外面には不明文。14の口縁部は内外面とも染付で縁取る。15～17の口縁部は僅かに外反する玉縁状。15の内面に小破片が釉着。外面には不明文。16の内面には弧状の連続文。17の内面口縁部付近は不明文。18は小碗の高台部。19は高台下にハマが釉着する。20～22は碗の体部。20は蘇鉄を含む山水か。21は外面に不明文、22は外面中位に宝珠文か。焼け歪が大きい。

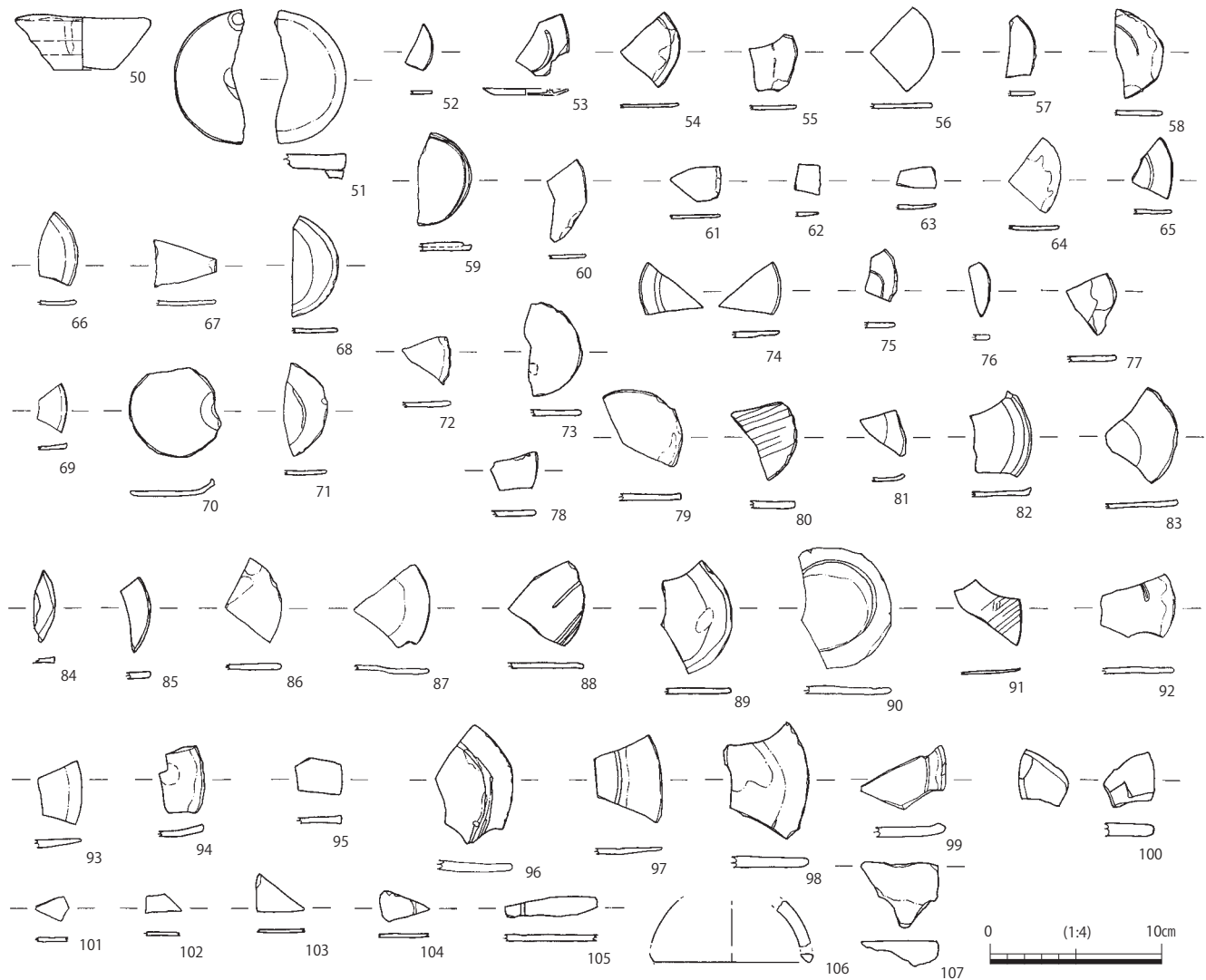
23～27は皿。23はやや浅く口縁部は端反り。内面に連続する雲と楼閣または四阿。24はやや深めで内湾し、見込は蛇の目釉剥ぎ。内面には連続する弧状の線と不明文。25は口縁部のみ。口縁部は端反り。文様は横方向を天地とする山水文。26・27は高台部のみ。

28は合子の身。口縁部は屈曲して内傾する。口縁部の立ち上がり際に重ね焼きの釉着あり。29は小鉢の口縁部か。口縁部外面に窯道具の小片が釉着する。天井部には不明文。30は内面露胎のため中型徳利の体部か。31～33は碗または小碗の口縁部。33の外面には不明文。34～44は、碗・小碗・皿等の体部片。いずれも外面に染付の文様をもつ。34は外面に十字方向の幾何学文か。35の外面には山水文か。山の一部と木の枝か。36の外面には花の文様か。37の外面には楼閣の一部、38の外面には文字か。39～44は体部片。43の外面の文様は不明。45は文様を確認できない。口縁部が湾曲しているため、菊皿等の白磁か。46・47は体部片。46雲の文様、47は頸部か。不明文。48・49は素焼き片で、絵付け前の同一個体の皿か。

b 窯道具

50は陶製のツク。断面は逆台形状。天井部には薄く釉がかかる。51は磁器の針付ハマ。針は1点のみ残存する。回転糸切りの痕がある。底面中央が窪むため、中央には孔か。

52から105は磁器のハマ。円盤状の一部で完存するものはない。周縁部は滑らかでなく、中心に向かう



第3図 吉成焼の窯道具（所蔵資料）

細かな罅割れをもつものがあり、篋や糸で切り離した後、痕跡を消して周囲を整えたことが分かる。以下、周縁部から直径を推定し、法量で分類した。

52は径約4cm。53～58は径約5cm。53は立ち上がりをもつ皿状で、内側に高台の一部が貼り付く。54の周縁部には釉がかかり、僅かに上方に屈曲する。55の内側には高台から下がる釉の痕跡あり。56の表面には回転ナデの痕あり。57の表面には薄く釉がかかる。58の周縁部は薄い釉がかかり、表面には高台の痕跡がある。59は径約5.5cm。二枚のハマを貼りあわせて使用する。周縁部には薄い釉がかかる。

60～80は径約6cmのもの。端部の形状と厚さで分類した。端部の形状には、①端部が丸く終わるもの：主体をなす、②端部がやや細くなり、緩く上方を向く：62・74、③端部付近を僅かに上方に折り皿状にする：63・67、④端部が肥厚し、上方に摘み上げる：69・70がある。器壁は60～69は2～3mm、70～78は3～

4mm、79・80は4～5mmである。ほか64・72は周縁部に釉がかかり、65・68・74の表面には高台痕とみられる浅い窪みがある。71・75には高台から下がる釉の痕がある。67の下面には篋または糸で一定方向に切り離した後ナデの痕跡がある。70は回転糸切り後一定方向のナデか。80は静止糸切り後一定方向のナデか。

81～90は径約7cmのもの。81は③、82は④、83・85は④の形状。84は、⑤周縁部を面取りする。87は周縁部を手で成形した後、薄く釉がかかる。88の表面には工具痕か。90の表面には径約5cmの高台による浅い窪みがある。

91～95は径約8cmのもの。91は器壁が約1～2mmで、他が4～5mmに比べて薄い。92の周縁部には薄い釉がかかる。一部高台の痕あり。93は②、94は⑤端部が肥厚する。周縁部は立ち上がり、薄く釉がかかる。95は④の形状。96は径約9cm、径約7cmの高台の窪みあり。



写真1 吉成焼の陶片及び窯道具



第4図 古市遺跡出土の吉成焼と窯道具

写真2 古市遺跡出土の吉成焼と窯道具

97～99は径約10cmで、いずれも表面に高台の跡とみられる窪みがある。98の中央付近には砂が付着する。100はハマの口縁部。針がないため断定できないが、2と同様の針付ハマか。101～105は径不明。106は磁器の輪ハマか。外径約9.5cm。107は陶器で表面に網目があり、蛸ハマの一部である。

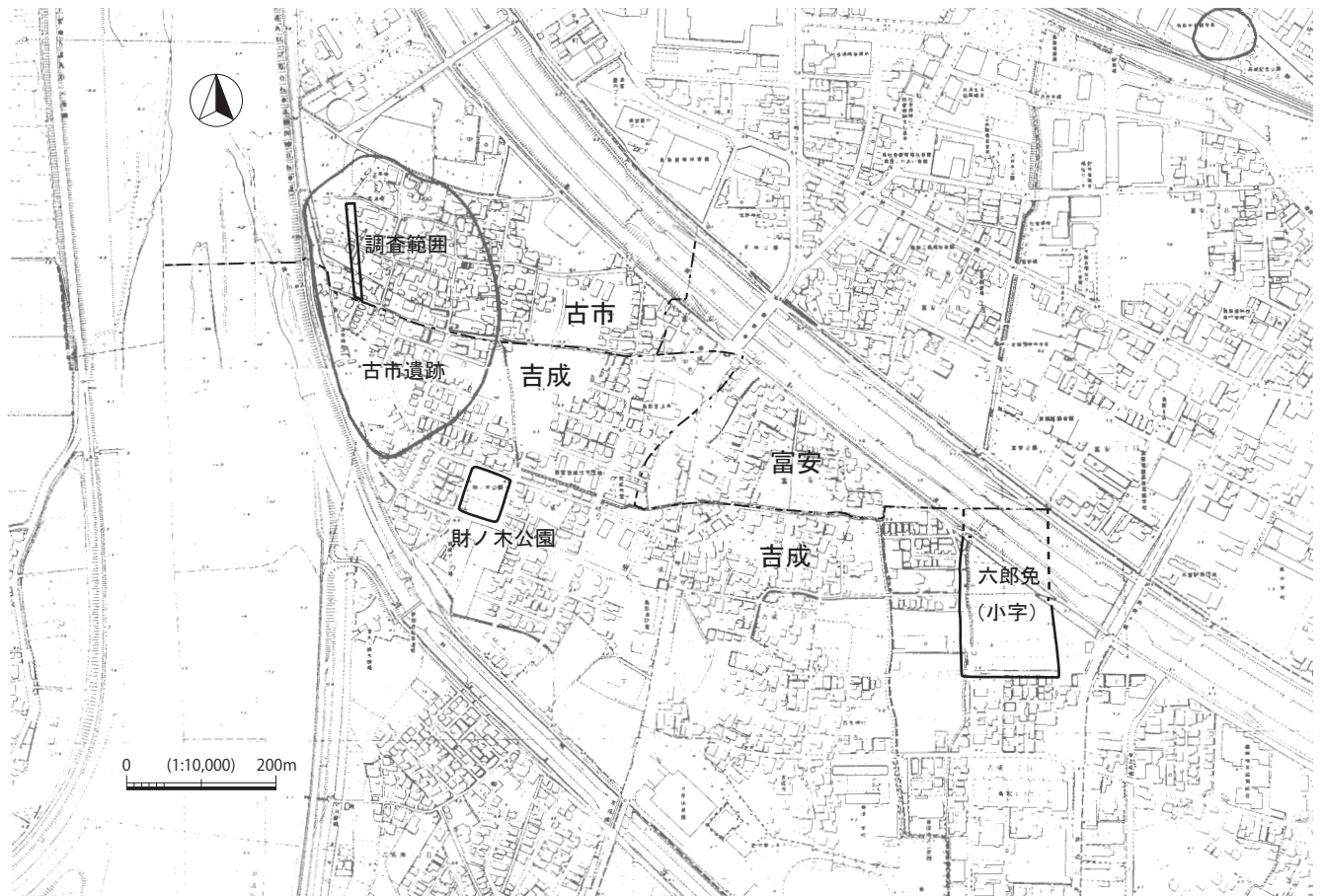
(2) 古市遺跡出土資料

古市遺跡は現在の千代川右岸、新袋川と千代川との合流地点から約0.5～0.6km南に位置する。吉成焼の陶片と窯道具が報告される。

108～110は染付。108は碗。歪みが大きく土砂が付着しており、窯内で床面に転落したものか。高台付近を地として草を大きく描く。109は鉢。透明釉が厚

くかかり、高台内中央に四角の中に「吉」の銘を入れる。文様は四方に寿の字を配し、間は向かい合う一對の草花と一對の山水を描く。見込は余白で中央には五弁の花、高台内には二重の四角に中央に吉で、因の中に吉を配したか。110は皿。周縁部は羊歯文。伝世品には因吉銘をもつ伝世品の水指（吉田1981）がある。

111～118は窯道具。111・112は陶製のトチン。111は小型で完存。112は中型で中央付近が折れる。113は陶製のチャツで、輪高台をもつ皿に使用されたものか。114～116はハマ。114は陶製で円柱状のもの。115・116は断面逆台形で、115は磁器で小型、116は陶製で大型のもの。117は磁器の針付ハマ。一部は欠損するが、五か所に針を残す。118は陶製の蛸ハマで、



第5図 吉成窯周辺図（鳥取市教育委員会 1994 から一部転載・加筆）

先端部が一部欠損するがほぼ完存する。天秤積の際に使用したもの。

(3) 陶片と窯道具の傾向

博物館所蔵資料と古市遺跡出土資料では、窯道具や製品の傾向が異なる。

a 窯道具

トチンは、古市遺跡では棒状のものがあるが、博物館所蔵資料には棒状のものはなく、ハマの器高を高くしたような断面逆台形状のものがある。ハマをみると博物館所蔵資料では薄い円盤状のハマが多数あるが、古市遺跡では厚い断面逆台形のハマのみである。ほか針付のハマと蛸ハマは両遺跡で出土する。

b 製品

古市遺跡のものは確認されている器種は碗、鉢、皿のみであるが、いずれも絵付けが上手で、透明釉を厚くかける。

博物館所蔵資料は碗皿類が中心で、絵付けの範囲は多くはなく、簡略な図柄が多く、楼閣や四阿、梅の図等がある。器種も多く、碗や小碗、中皿のほか、菊皿、合子、小鉢、中型の徳利がある。窯道具はきわめて薄いハマが主体を占めることから、碗皿類の重ね焼きに

よる多数の生産を志向する傾向がある。

所蔵資料と古市遺跡の出土品を比較すると、古市遺跡のものは絵付けが上手で透明釉も厚く、銘をもつものもあり、藩の御用の品としての性格が強い。一方所蔵資料は絵付けも簡素で、器種も日用品としての性格が強い。窯道具も重ね焼きのハマが主体をなす。ほか菊皿や合子等の小物類、中型徳利という、いわゆる庶民の器を志向しているともいえる。

この違いが窯場の違いなのか時期差によるものかは明瞭ではない。開窯から9年後にも御用の品を焼いてはいるものの、上手の品と大量生産の品とでは陶工の技量、とりわけ絵付けの力量差が大きい。後出する磁器窯には浜坂焼と鶴殿氏の経営した浦富焼がある。こうした窯でも御用の品と一般的な器を生産しており（八峠 2013）、遡る吉成焼でも同様の傾向があると考えたい。

3 吉成焼の生産と系譜

(1) 窯場の位置

窯場の候補地は複数ある。『鳥取県史』5 近世・文化産業では、資料2に記される「傍示」を吉成村の「村

境」とする（鳥取県 1982）。古市遺跡の報告では、遺存状況のよい製品や窯道具が出土することから、遺跡地周辺に窯場のある可能性を示唆（鳥取市教育福祉振興会 1999）する一方、窯場は調査地の南側にあると報告する（鳥取市教育福祉振興会 1998）^{（註3）}。

第5図は周辺の字図^{（註4）}である。吉成には、「六郎免」との小字があり、六郎を「ロクロウ」と読めば轆轤、免が「免除」を意味するとすれば、陶磁器等、焼物の生産に係る免税地と推測できる。位置的にも富安村との境で、「村境」との解釈とも矛盾しない。現状では小字の南東側は昭和に行われた新袋川の工事により掘削され（建設省中国地方事務局 鳥取工事事務所 1978）、旧状を留めない。

吉成焼の営窯期間は、資料7でみると八年以上あり、資料6の浜坂焼と同様、試行錯誤のためか窯場の位置が複数あることも予想できる。

(2) 吉成焼の系譜

吉成焼と同時期の出石焼でも複数の窯跡が推測できるものの、小型の焼台が採集されたのみで、物原や伝世品は無いとされる（兵庫県立歴史博物館 1998）。そのため出石焼の系譜とされる当地の浜坂焼（八峠 2013）と浦富焼（鳥取陶磁器研究会 2012）と吉成焼を比較する。

顕著な違いが認められるのは窯道具である。吉成焼では浜坂焼や浦富焼に使用される逆円台形のハマ、陶製の蛸ハマやツク、肥前にはない厚い円盤状で針付のハマが共通するものの、吉成焼では浜坂焼や浦富焼にはない、薄い磁器のハマを主体とする。

染付の器種では、吉成焼には碗、小碗、皿、菊皿、合子、小鉢、中型の徳利があり、これは浜坂焼や浦富焼と同様であるが、これらの窯で多く出土する小皿や八角鉢等は認められない。

絵付けは、吉成焼では梅花、草花、四阿を含む山水、丸文、宝珠文があり、浜坂焼や浦富焼の文様と共通する。碗皿類の見込文は、吉成焼では三点確認しているが、いずれも浜坂焼や浦富焼で主体となる「寿」・「胡蝶」・「雁金」とは異なる。

浜坂焼や浦富焼には文様は雲や四阿を含む山水文があり、吉成焼とも共通するが、これらの窯に多い「笹」や「鶴」、「蝙蝠」は確認できない。

ただし吉成焼の陶片は銘のある伝世品と今回紹介した僅かな点数に限られ、吉成焼の全容を示すとは言い難い。そのため差異は時期差なのか、系譜の違いなのか判断は分かれるだろうが、現段階ではこれ以上の資料の増加は見込めないのも事実である。

小括すると吉成焼は、吉田氏が指摘する「伊万里の

仿製」（吉田 1981）を目指すにせよ、窯道具や絵付けから肥前のみ系譜を求めることは難しい。資料4には、文化七（1810）年七月二十四日に御国産方が吉成焼物場に石焼職人を召致し製陶に当らせたとするが、肥前の職人を召致することは困難が予想される。同じ時期に周辺地域で営窯していた磁器窯は出石焼の大谷窯（兵庫県立歴史博物館 1998）のみである。

この窯は出石藩の創窯で、後出する浜坂焼と浦富焼とが同じ出石焼の系譜であることから、遡る吉成焼でも藩同士で何らかの関係が想定できはしないか。新たな史料を探すことはもちろん、両窯の出土品を比較検討していく必要がある。

おわりに

本稿は吉成焼について採集資料を図化し、発掘調査での出土品や文献資料を集約して解釈を試みたものである。もともと消費遺跡から出土する出石焼と浜坂焼、浦富焼を分類できるのかという疑問から発した課題は吉成焼を加え、出石焼を主体とする因幡・但馬・丹後地域の磁器生産を総合的に解明する必要が生じたことになる。今後の課題としていきたい。

最後に、鳥取県立博物館では数か月にわたり所蔵資料の記録作成をさせていただいた。古市遺跡出土品は鳥取市教育委員会と鳥取市埋蔵文化財センターに実見及び写真撮影をさせていただいた。文献資料や吉成周辺の状況について鳥取地域紙研究会の方々、古市遺跡の成果は調査を実施し、報告書を執筆した藤本隆之氏にご教示をいただいた。ご協力いただいた皆様方に深く感謝したい。

註

註1 鳥取県立博物館『家老日記』データベースを参照した。

註2 「壺焼」の対象は陶器あるいは磁器なのか、壺甕類もしくは碗皿類なのか、確実な解釈は難しい。

註3 調査担当者によると、周辺住民や郷土史家の方々からの聞き取り調査で「財ノ木公園」周辺に窯場が想定されているとのことである。

註4 字の範囲は新袋川の付け替えに伴い一部変更された。そのため付け替え前の字図を参照しつつ必要な範囲のみ復元した。

引用・参考文献

- 岩美町教育委員会 1970 『因州 浦富窯の紹介』
岡本久彦・山口久喜編・著者 1984 『但馬のやきもの』
建設省中国地方事務局 鳥取工事事務所 1978 『千代川史』
鳥取県 1971 『鳥取藩史』第六巻「殖産商工志 事変志」

鳥取県 1980 『鳥取県史』第 10 巻 近世資料
 鳥取県 1981 『鳥取県史』第 11 巻 近世資料
 鳥取市教育委員会 1994 「鳥取市埋蔵文化財分布図」
 鳥取市教育福祉振興会 1998 『古市遺跡Ⅰ』
 鳥取市教育福祉振興会 1999 『古市遺跡Ⅱ』
 鳥取陶磁器研究会 2012 『浦富焼窯跡出土陶片の紹介』
 原宏 1981 「鳥根のやきもの」『日本やきもの集成〔8〕』平凡社
 兵庫県立歴史博物館 1998 「収蔵資料目録 6 山口コレクション
 -古出石焼-

三谷巍 1982 「ウツロ谷の窯跡」『鳥取県立博物館研究報告』第 19 号
 八峠興 2013 「鳥取・浜坂焼についての報告と若干の考察-ウツロ谷の窯跡から出土した資料を基に-」『鳥取県立博物館研究報告』第 50 号
 吉田政博 1981 「鳥取のやきもの」『日本やきもの集成〔8〕』平凡社

【観察表凡例】

◎陶土の分類：①雲母・黒色粒・白色粒・砂粒含、②雲母・黒色粒・白色粒含、③雲母・黒色粒・砂粒含、④雲母・白色粒・砂粒含、⑤黒色粒・白色粒・砂粒含、⑥雲母・黒色粒含、⑦雲母・白色粒含、⑧雲母・砂粒含、⑨黒色粒・砂粒含、⑩黒色粒・砂粒含、⑪白色粒・砂粒含、⑫雲母含、⑬黒色粒含、⑭白色粒含、⑮砂粒含、⑯精緻

◎焼成の分類：良好・良・ふつう・やや不良・不良の 5 段階

◎釉調の基準

標準土色帳 農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修

カラーチャート制作 株式会社ジーイー企画センター・発行
 DIC グラフィック株式会社

◎実測No：県立博物館所蔵資料（筆者の実測に拠るもの）、また古市遺跡の掲載Noは報告書に拠る。

第 1 表 所蔵資料観察表 陶片(1)

No.	器種	釉調	陶土・焼成	口径 (長)	底径 (幅)	器高 (厚)	呉須・備考	実測 No.
1	染付小碗	⑦ C10/Y10	⑥良好	※ 10.8	—	△ 3.6	⑥ C60/M20	85
2	染付小碗	⑦ C20/M5/Y10	⑥良好	※ 10.7	—	△ 2.6	⑦ C70/M20/Y10	75
3	染付碗か	⑦ C10/Y10	⑫やや不良	※ 12.0	—	△ 1.4	⑤ C30/K5	82
4	染付鉢	⑤ C10/K5	⑥良好	※ 13.8	—	△ 2.3	⑤ C50/K30	78
5	染付碗	⑨ C5/M10/Y30	⑫不良	—	※ 5.1	△ 2.7	呉須不明	58
6	染付碗	⑤ C10/K5	⑥良好	—	4.7	△ 3.1	⑧ C80/M40/Y20	88
7	染付小碗	⑧ C50/M5/Y20	⑧不良	—	※ 4.1	△ 1.7	⑥ C50/M20	93
8	染付碗か	⑦ C10/Y10	⑥良	—	—	△ 0.7	⑤ C50/K10	76
9	染付小碗	⑦ Y10	⑫やや不良	※ 9.0	—	△ 4.9	⑤ C20/K60	89
10	染付小碗	⑦ Y10	⑫やや不良	※ 9.0	—	△ 4.0	⑤ C20/K60	90
11	染付小碗	⑦ C10/Y10	⑥良好	※ 8.9	—	△ 3.5	⑥ C30/M30	83
12	染付小碗	⑨ M5/Y30	⑥不良	※ 7.8	—	△ 3.1	⑧ C50/M20/Y20	92
13	染付小碗	⑦ C5/Y10	⑫良好	※ 7.9	—	△ 2.7	⑥ C70/M20	84
14	染付小碗	⑤ C10/K5	⑥良好	※ 7.8	—	△ 2.6	⑫ C70/M20/Y10/K10	77
15	染付小碗	⑤ C10/K5	⑫良好	※ 9.7	—	△ 1.7	⑥ C30/K40 破片粘着	81
16	染付小碗	⑨ C10/M10/Y30	⑥不良	※ 9.8	—	△ 2.2	⑦ C60/M20/Y10	79

第 2 表 所蔵資料観察表 陶片(2)

No.	器種	釉調	陶土・焼成	口径 (長)	底径 (幅)	器高 (厚)	呉須・備考	実測 No.
17	染付小碗	⑦ C10/Y10	⑥良好	※ 9.5	—	△ 1.7	⑫ C20/Y10/K30	80
18	染付小碗	⑨ C5/M10/Y30	⑫不良	—	※ 3.0	△ 2.1	呉須不明	59
19	染付高台部	C5/Y10	⑥良好	—	△ 2.0	△ 1.5	呉須不明 ハマ粘着	62
20	染付碗	⑤ C5/K5	⑫良好	—	—	△ 2.2	⑤ C40/K40	95
21	染付碗	⑤ C5/K10	⑧やや不良	—	—	△ 2.3	⑥ C60/M20	96
22	染付碗	⑤ C5/K5	⑥良好	—	—	△ 3.3	⑦ C80/M20	97
23	染付皿	⑤ C10/K5	⑥良好	※ 21.1	※ 12.2	3.0	⑥ C50/M5	86
24	染付皿	⑤ C10	⑥良好	※ 20.0	※ 7.1	4.0	⑤ C40/K10	87
25	染付皿	⑥ C10	⑧良好	※ 19.0	—	△ 2.6	⑦ C70/M30/Y10	91
26	染付皿	⑦ C10/Y50	⑥良好	—	※ 11.7	△ 1.0	呉須不明	63
27	染付皿	⑦ C10/Y10	⑫良好	—	※ 9.8	△ 1.4	呉須不明	57
28	染付合子身	⑤ C5/K5	⑥良好	※ 9.0	—	△ 2.1	⑤ C10/K10	94
29	染付小鉢か	⑫ C5/K10	⑫良好	※ 9.6	—	△ 0.8	⑫ C50/K10 窯道具粘着	99
30	染付中型徳利	⑤ C10/K5	⑥良	—	—	△ 2.8	⑥ 呉須不明	72
31	染付口縁部	⑦ C20/M5/Y10	⑫良好	—	—	△ 2.8	方形鉢か 呉須不明	65
32	染付口縁部	⑨ M10/Y30	⑫良好	—	—	△ 2.8	呉須不明	66
33	染付口縁部	⑤ C5/K10	⑫良	—	—	△ 2.5	⑫ C30/K10 焼け歪、砂利粘着	98
34	染付体部	⑫ C10/M5/Y10/K10	⑬良好	—	—	△ 3.2	⑤ C50/K80	105
35	染付体部	⑤ C5/K10	⑫良好	—	—	△ 2.3	⑤ C40/K30	104
36	染付体部	⑤ C5/K5	⑫良好	—	—	△ 2.2	⑤ C30/K60	103
37	染付体部	⑫ Y10/K10	⑫良好	—	—	△ 2.0	⑫ C70/M30/K10	102
38	染付体部	⑫ M10/Y30/K10	⑫不良	—	—	△ 1.3	⑫ C70/M20/Y10/K10, 小碗か	100
39	染付体部	⑦ C5/Y10	⑫やや不良	—	—	△ 2.1	呉須不明	70
40	染付体部	⑦ C20/M10/Y10	⑥良好	—	—	△ 1.5	呉須不明	69
41	染付体部	⑨ C5/M10/Y30	⑥不良	—	—	△ 1.6	呉須不明	68
42	染付体部	⑦ C20/M5/Y10	⑫良好	—	—	△ 1.9	呉須不明	64
43	染付体部	⑦ C10/Y10	⑫良好	—	—	△ 1.7	⑥ C50/M5 皿か	101
44	染付体部	⑤ C10/K5	⑥良好	—	—	△ 1.1	呉須不明 皿か	71
45	白磁口縁部	⑥ C10	⑫良好	—	—	△ 1.9	呉須不明 菊皿か	67
46	染付体部	⑦ C10/Y10	⑫良好	—	—	△ 1.1	⑦ C100/M60/Y10, 皿か	107
47	染付体部	⑦ C5/Y10	⑥良好	—	—	△ 2.4	⑨ C5/M40/Y30 鉢頸部か	106
48	素焼き体部	(素地)5Y8/1 灰白色	良	—	—	△ 2.6	49 と同一か 皿か	73・74
49	素焼き体部	(素地)5Y8/1 灰白色	良	—	—	△ 1.2	48 と同一か 皿か	73・74

第3表 所蔵資料観察表 窯道具(1)

No.	器種	色調	陶土・ 焼成	口径 (長)	底径 (幅)	器高 (厚)	備考	実測 No.
50	陶器 ツク	10YR4/1 褐灰色	良	7.9	3.6	3.3	石英・長石・黒 雲母・砂粒含	20
51	磁器 針付 ハマ	10YR8/3 浅黄橙色	⑨良好	△7.8	△3.5	△1.5		19
52	磁器 ハマ	2YR7/3 浅黄色	⑬良好	△2.7	△1.3	0.2		51
53	磁器 ハマ	5Y8/1 灰白色	⑥良好	※5.0	※3.4	0.4	皿形状 輪高台釉着	61
54	磁器 ハマ	10YR7/3 にぶい黄橙色	⑫良好	△4.4	△3.5	0.2		37
55	磁器 ハマ	2.5Y8/2 灰白色	⑥良好	△3.4	△2.8	0.3		48
56	磁器 ハマ	2.5Y8/3 浅黄色	⑫良好	△4.9	△3.6	0.3		23
57	磁器 ハマ	10YR8/3 浅黄色	⑫良好	△3.6	△1.6	0.3		50
58	磁器 ハマ	2.5Y7/3 浅黄色	⑫やや 不良	△5.7	△2.7	0.3		36
59	磁器 ハマ	2.5Y8/3 浅黄色	⑫良好	△5.5	△3.1	0.5	2点釉着	16
60	磁器 ハマ	10YR7/3 にぶい黄橙色	⑫良好	△5.0	△2.2	0.25		40
61	磁器 ハマ	2.5Y7/3 浅黄色	⑫やや 不良	△2.0	△2.9	0.25		44
62	磁器 ハマ	5Y8/1 灰白色	⑫良好	△1.7	△1.5	0.25		41
63	磁器 ハマ	2.5Y8/3 淡黄色	⑫不良	△1.2	△2.4	0.25		55
64	磁器 ハマ	2.5Y8/3 淡黄色	⑫良好	△4.4	△3.2	0.25		8
65	磁器 ハマ	2.5Y8/3 淡黄色	⑥良好	△3.6	△2.3	0.25		47
66	磁器 ハマ	2.5Y7/3 浅黄色	⑪良好	△4.4	△2.3	0.25		22
67	磁器 ハマ	2.5Y8/3 淡黄色	⑪良好	△2.7	△3.5	0.3		10
68	磁器 ハマ	2.5Y8/3 淡黄色	⑪良好	△5.9	△2.6	0.3		2
69	磁器 ハマ	2.5Y8/2 灰白色	⑬良好	△2.8	△1.6	0.3		39
70	磁器 ハマ	2.5Y8/3 淡黄色	④不良	5.5	5.1	0.4		18
71	磁器 ハマ	2.5Y7/3 浅黄色	⑫良好	△5.4	△2.5	0.3		9
72	磁器 ハマ	2.5Y8/3 淡黄色	⑫良好	△2.9	△2.8	0.3		11
73	磁器 ハマ	2.5Y8/3 淡黄色	⑪やや 不良	△5.4	△3.0	0.4		13
74	磁器 ハマ	2.5Y7/3 浅黄色	⑫良好	△3.1	△3.8	0.4		56
75	磁器 ハマ	2.5Y8/3 淡黄色	⑫良好	△3.1	△1.8	0.35		52
76	磁器 ハマ	2.5Y8/3 淡黄色	⑫良好	△3.2	△1.1	0.3		43
77	磁器 ハマ	2.5Y8/2 灰白色	⑫良好	△3.7	△2.9	0.35		45
78	磁器 ハマ	10YR8/3 浅黄橙色	⑥良好	△1.7	△2.7	0.4		46
79	磁器 ハマ	2.5Y8/4 浅黄色	⑨やや 不良	△5.8	△3.6	0.5		12
80	磁器 ハマ	2.5Y8/3 淡黄色	⑫良好	△4.6	△3.6	0.4		26
81	磁器 ハマ	10YR8/2 灰白色	⑥良好	△2.7	△2.3	0.25		49
82	磁器 ハマ	10YR8/2 灰白色	⑫不良	△5.1	△3.3	0.3		17
83	磁器 ハマ	2.5Y8/3 淡黄色	⑤やや 不良	△5.6	△4.2	0.3		24
84	磁器 ハマ	2.5Y8/3 淡黄色	⑫良好	△4.2	△1.3	0.4		42
85	磁器 ハマ	2.5Y8/3 淡黄色	⑩やや 不良	△4.4	△1.4	0.4		27
86	磁器 ハマ	7.5Y8/3 浅黄橙色	⑫不良	△5.1	△3.3	0.4		7
87	磁器 ハマ	10YR8/3 浅黄橙色	⑩良好	△4.9	△4.4	0.3		15

第4表 所蔵資料観察表 窯道具(2)

No.	器種	色調	陶土・ 焼成	口径 (長)	底径 (幅)	器高 (厚)	備考	実測 No.
88	磁器 ハマ	2.5Y8/1 灰白色	②やや 不良	△4.9	△4.5	0.4		14
89	磁器 ハマ	10YR8/4 浅黄橙色	②不良	△6.6	△4.2	0.4		1
90	磁器 ハマ	10YR8/2 灰白色	⑩良好	7.0	△5.3	0.5		5
91	磁器 ハマ	2.5Y8/2 灰白色	⑫不良	△2.7	△3.7	0.2		53
92	磁器 ハマ	10YR8/3 浅黄橙色	⑨良好	△3.6	△4.6	0.4		6
93	磁器 ハマ	2.5Y8/3 淡黄色	⑫良好	△3.7	△2.5	0.5		38
94	磁器 ハマ	2.5Y8/3 淡黄色	⑫良好	△3.9	△2.6	0.4		25
95	磁器 ハマ	2.5Y8/3 淡黄色	⑫良好	△2.3	△2.8	0.5		54
96	磁器 ハマ	10YR8/4 浅黄橙色	⑩やや 不良	△6.9	△4.5	0.5		3
97	磁器 ハマ	2.5Y7/3 浅黄色	⑫良好	△5.2	△3.8	0.4		35
98	磁器 ハマ	10YR8/2 灰白色	⑤良好	△6.8	△4.5	0.7		4
99	磁器 ハマ	2.5Y8/2 灰白色	⑫良好	△2.6	△5.6	0.6		21
100	磁器 ハマ	2.5Y8/2 灰白色	⑫良好	△2.9	△2.9	0.8		28
101	磁器 ハマ	2.5Y8/2 灰白色	⑫良好	△1.5	△1.9	0.3		34
102	磁器 ハマ	10YR8/3 浅黄橙色	⑫良好	△1.1	△2.1	0.25		33
103	磁器 ハマ	2.5Y8/2 灰白色	⑫不良	△2.2	△2.8	0.2		31
104	磁器 ハマ	2.5Y8/2 灰白色	⑫良好	△1.8	△3.0	0.3		32
105	磁器 ハマ	2.5Y7/3 浅黄色	⑫良好	△1.1	△5.4	0.4		30
106	磁器 輪ハマ	(釉) ⑦ C10/Y10	⑫良好	※9.5	※9.0	△0.5	※施釉、製品か 上面剥離か	60
107	陶器 蛸ハマ	5YR8/4 淡橙色	良	△4.5	△4.3	△1.5	砂粒・黒雲母多 く含む、布目有	29

第5表 古市遺跡出土資料観察表

No.	器種	釉調	陶土・ 焼成	口径 (長)	底径 (幅)	器高 (厚)	呉須・備考	実測No.
108	染付 碗	⑦ C5/Y10	⑦良好	※9.4	※3.2	5.5	⑤ C50/K50 SD-A00	第50 図-135
109	染付 鉢	② C5	⑫良好	10.3	5.0	4.6	⑥ C90/M30 SD-A00	第50 図-138
110	染付 皿	⑦ C10/Y10	⑦良好	12.7	7.2	2.4	⑤ C50/K50 遺構外	第50 図-141
111	陶器 トチン	5YR4/4 にぶい赤褐色	良	6.0	5.8	8.5	石英、長石、 黒雲母含	第51 図-149
112	陶器 トチン	5YR3/4 暗赤褐色	良	8.0	—	△7.9	黒雲母、砂粒、 礫含	第51 図-150
113	陶器 チャツ	2.5Y7/3 浅黄橙色	良	※7.0	5.1	2.9	長石、雲母含	第51 図-148
114	陶器 ハマ	10YR7/2 にぶい黄橙色	やや 不良	5.6	5.4	2.9	長石、雲母、 砂粒含	第51 図-144
115	陶器 ハマ	10YR6/2 灰黄褐色	良	7.2	4.2	1.4	長石、ウナ粒 含	第51 図-146
116	磁器 ハマ	10YR8/1 灰白色	④良好	11.6	5.4	2.2		第51 図-145
117	磁器 五足ハマ	5Y5/1 灰白色	⑦良好	7.5	7.4	1.5		第51 図-147
118	陶器 蛸ハマ	5YR3/4 暗赤褐色	良好	25.1	10.7	5.3	石英、長石、 黒雲母、礫含	第51 図-151